

# 演奏家の耳に届くホールの響

## ステージで演奏する「耳の達人」たちに聞く

田部京子 Kyoko Tabe ● ユーアニスト

小松長生 Chosei Komatsu ● 指揮者

真嶋雄大 Yudai Majima ● 音楽評論家(司会)

コンサートは、演奏家、聴衆、ホールその他の条件がすべて揃って初めて成立するものである。であれば、演奏家こそホールをどのような視点で捉えているのか、あるいはどのようなこだわりがあるのか、ユーアニストの田部京子さん、指揮者の小松長生氏に大いに語っていただいた。



座談会は音楽之友社(東京・神楽坂)で行われた

Round-table talk  
about the sound  
in the Japanese halls  
—Kyoko Tabe,  
Chosei Komatsu,  
Yudai Majima

ピアノはある程度残響がある  
ホールの方が弾きやすい

真嶋 初めに、演奏家としてお好きな、あるいは演奏しやすいホール(以下、主にH)はありますか？

小松 まずはサントリーH、札幌コンサートH・Kitara、そしてほかが福井出身ということでもないんですが(笑)、ハーモニーホールふくいですね。サントリーに関しては舞台裏からステージ上での音のミックス、お客様との親近感、それと周りの環境もすべてが一級品という感じがします。Kitaraは北海道の星空じゃないですが、空から音が降って来るようです。ふくいは音響の質が高い。また舞台裏がロビー以上に広くて控室もすごい広さなんです。そういうことも含め、総合的にみて世界一級であると認識しています。

田部 そうですね、協奏曲では、サントリーH、すみだトリフォニーH、東京オペラシティ、大阪シンフォニーHなどでしようか。ステージ上で弾いているとピアノの音の抜



小松長生(こまつ・ちようせい) 東京大学美学芸術学科卒。イーストマン音楽院大学院指揮科卒。エクソン指揮者コンクール優勝。2011年9月、著書リーダーシップは「第九」に学べ(日本経済新聞社出版社)を上梓。パッファロー管エクソン派遣指揮者、ホルティモア響アソシエイト、キッチナー・ウォーター響、武生国際音楽祭などの音楽監督、東京フィル正指揮者などを経て、現在コスタリカ国立響桂冠指揮者、セントラル愛知響名誉指揮者。金城学院大学教授として後進の指導にもあたっている。

けが良く、心地良い響きが耳に返って来てとても気持ちがいいですね。また北海道出身だからということではありませんが(笑)、Kitaraがいいですね。透明感がありつつ、豊かな響きに包まれるようなホールの音響はもちろん素晴らしいんですが、外に出たときの緑に囲まれた静寂など、東京の都心にはない良さがあるって、しばらく音楽に浸っていただける空気感などトータルで好きですね。

リサイタルですと、こよなく愛しているのは浜離宮朝日H。とても細かなニュアンスまで客席に届くことで、良い集中力を持って聴いて頂いているのがステージの上でも感じられて、相乗効果で一体感が生まれます。リサイタルシリーズも10年目にな

ります。それから、紀尾井H、いずみHなども好きですね。

真嶋 海外での印象的なホールはありましたか？

小松 この4月にベルリン・フィルハーモニーHで、『第九』を振ったんですが(※)、サントリーHと共通する感じがありません。またお客様が気にならないんです。集中できるというか、磁場が良いというか……。

田部 ベルリン・フィルハーモニーHは、小ホール(1000人)も同じような造りですが、すり鉢状の中央に舞台があるので、弾いていると1階の客席は近いですが、音響は本当に素晴らしいです。

真嶋 そのお客さまですが、演奏者の方た

ちは、どのように感じていらっしゃるか？

田部 協奏曲の時などは、舞台スペースの都合上、ピアノは本当に舞台の崖っぷちというか、手前ギリギリにピアノが置かれることがあります。最前列中央のお客さまが近くて、その上あまりにモゾモゾ動かれたりすると、やはりどうしても視界に入ってしまうですね……(笑)。

小松 それは気になりますよね。何かゼロハンみたいな音がする時もある……(笑)。またホールによつては、お客さまが入ってガラッと変わる所とあまり変わらない所があつて、やっぱりいいホールといわれている所は、あまり変わらないですね。お客さまが入ったから音を吸収するとよく言いますが、ぼくはあまり関係ないと思いますね。

真嶋 国によつても聴衆の気質などは、変わりますか？

小松 北米やラテン系、ヨーロッパもある程度ですけど、全然違いますね。例えばドイツはやはり落ち着いて聴いてくださる感



ていると思いますが、昔に比べて良くなったホールなどはありますか？

小松 すみだトリフォニーHはどんどん良くなったホールですね。改善もされてるんでしょけれど、実感します。

真嶋 確かにピアノがものすごく綺麗に聴こえますね。

田部 そうなんです。あの大きな空間に立ち昇るような音の透明感、本当に気持ちいいんです。

小松 オケの音もすごく変わりました。5年ほど10年ほどにいろんな工夫や改装もされたので、思えばいい響きが出てきたんじゃないかな。

真嶋 ほかに印象的なホールはありますか？

田部 1970年代に建てられて音響に定評のあった石橋メモリアルHなども、3年前に新しく建て替えられてさらに良くなりました。豊潤な響きで、フレームスのピアノ作品、モーツアルトの協奏曲などもレコーディングしました。

小松 名古屋のしらかわHもすばらしいですね。ここではセントラル愛知も演奏していますし、また名古屋フィルやアンサンブル金沢もやっています。それと石川県立音楽堂もいいホールですね。

田部 そうですね、あとは静岡音楽館AOL、岐阜サラマンカH、所沢ミュージズHなども良いですね。

真嶋 岡谷のカノラHも、大きめの割には本当に親密感があって、大きなオケでも緻密なアンサンブルが聴けるんです。

小松 もっとたくさんあるんだけど、名前

が挙がらないってマズいよね(笑)。

田部 あり過ぎて思いだせない……(笑)。

小松 田部さん、恨まれるよ(笑)。

真嶋 ホールによって、木管や金管と弦などのバランスに苦労されたりすることはありますか？

小松 自分がホームとしている所だと、逆にいじらずにオケに任せたりしますね。日本のホールに対して言うことはあまりないけれど、北米のいろんな超一流のオケは気持良くなると「わーっ」と鳴るんで、その辺のコントロールがね(笑)。気持ちが乗ると……

真嶋 ……あ、あれで気持ちが良くなるって言うんだね、吹いている方は。フィラデルフィアもそうだし。そういう所って弦が消えないんですよ。だから北米でもカナダでもとにかく弦が消えないことを基準にして金管のボリュームが決まってくるんです。

田部 そういうホールをホームにしているオケの人たちが、ツアーなどで他のホールに行く時には、やっぱりバランス調整を綿密にするんですか？

小松 そうですね、必ず20分くらいはバランス・チェックしますね。逆に完全にデッ

ドなホールをホームにしてるオケもあるわけですね。そういうオケは音価が長い

んです。八分音符って書いてあるのを付点八分音符とか、八分音符を四分音符とか、それで「なんか長くないですか」って休憩時間に聞いてみたら、彼らは「ぼくらで残響を作ってるんです」って(笑)。

田部 そうしたくなる気持ち、ピアニストとしては良くわかりますね(笑)。

真嶋 つまり、本当にデッドなホールだと相当苦労されるんですね。

小松 コスタリカ交響楽団はそれに近いです。だから他のホールに行くときと本当にいい音がします。そういうところで厳しさに通じますか？

真嶋 ……そこ、コンティニューの音が違いますよ。……あ、あれで響き方が違うって、あんなに響き過ぎるとわんわんしちゃつし……。難しいですね。

小松 そう、だからいいホールでやればやるほど、弓使いが複雑になるんです。ホールが悪いと、弓使いはベタベタ、ガーガーでいくしかない。だから弓使いを見ると、大体そのオケのホールがどのくらいのものかがわかる。

田部 それは、ピアノにも言えることだと思います。微妙なニュアンスや余韻を出したいと思っても、例えば巨大な空間のホールでピアノ

一台、まったくデッド

で、求める音が自分の耳に返らず、客席にも伝

わらない場合、ダイナミックレンジを大胆にしたり、ペダリングやテンポ感なども自然と微調整が必要になります。

真嶋 これはかなり無茶ぶりの質問なんですけど、特定の作曲家の作品を演奏するのに適したホールなんてありますか？ ベルトゥエンに合ってるのか……。

田部 例えはですが、古典でモーツアルトのように音階が多く出てくるものは、速い二度の音型の響きがかぶってしまうほど残響が長いと、細かい粒立ちが聴こえず、もたついて聴こえるのでキツイですね。逆にロマン派以降は、多少響きが多くても弾き方、コントロールすると大抵は問題ありません。

真嶋 近年、指定管理者制度が始まって、ホールとのお付き合いで何か感じられていることなどはありますか。

小松 成功している所は新しいアイデアを出しながらも、プロフェッショナルな人の意見を採り入れていますよね。どこかに丸投げしたり、あるいは自分が独り善がり

で突き進んだり、この両極端も現実にはあると思いますけど、そのバランスをきちんとやっているホールもあるわけですから、そういう所は逆にやりやすくなったんじゃないかと思えます。今までは両極端が生じやすかったんですけど、新体制になってその中間のいいバランスが取れるようになってきたのではないのでしょうか。

真嶋 長時間、ありがたございました。

※編集部注：ベルリンフィルハーモニーホール開設50周年記念、日独親善第九演奏会、オーケストラは、フランケンブルク州立管弦楽団、フランクフルト



真嶋雄大 (まじま・ゆうだい) 音楽評論家。「音楽の友」「レコード芸術」などの音楽専門誌に執筆。「ピアニストの系譜」を上梓。ONTOMO MOOK「ピアノ&ピアニスト」監修者(ともに音楽之友社刊)

ルでピアノ  
一台、まっ  
たくデッド  
で、求める  
音が自分の  
耳に返らず、  
客席にも伝